

国際会議協会 (ICCA) 通信

ICCA 総会アジアパシフィック・ハブ(長崎)開催報告



(一社)MICE 総研 上席研究員(コングレグループ) 西本 恵子

国際会議協会 (ICCA: International Congress and Convention Association) は、国際会議ビジネスに関わるMICE施設・行政・コンベンションビューロー・PCO・DMC・その他サプライヤーで構成される国際的な産業団体です。1963年にヨーロッパで発足して以来、MICEビジネスの成長とともに全世界に拡大しており、約100カ国1,100団体が加盟する規模に成長しました。

今年のICCA年次総会は昨年に引き続き、大陸ごとにハブ会場を置いた「マルチハブ・ハイブリッド開催」となりました。これはコロナ禍により国と国との往来が制限される中、移動可能な範囲内での対面開催を復活させるための試みです。メイン会場であるコロンビア共和国カルタヘナのほか、パリ、ヨハネスブルグ、アブダビ、ソウル、そして長崎でのハブ会場設置が決まりました。今月のICCA通信では、2021年10月25日から3日間にわたり、開業直前の出島メッセ長崎に設けられた長崎ハブ会場の模様をお伝えします。



地元開会式

10月25日の夕刻から開催された地元開会式では、観光庁長官およびJNTO理事長からのビデオメッセージが寄せられた後、「長崎と出島」をテーマにしたリレー講演が行われました。この締めくくりとして田上市長より、昭和の観光都市から21世紀の交流都市へ、時代の変化に対応して新しい交流を創り出し、それをエネルギーとして進化を続けている長崎のまちづくりについて説明がなされました。



長崎市の観光客は1990(平成2)年をピークに2004(平成16)年頃まで減少傾向にあり、また、その頃は、旅行の形が団体旅行から個人旅行へ変化している時期でした。そこで、まちが持つ地域資源を活かすために『まち歩き(=長崎さるく)』を新しい長崎の観光の動きとしてスタートさせました。

その一方で、まちのさまざまな地域資源を磨く取り組みも

進めました。例えば、世界新三大夜景に認定された夜景をより楽しむ仕掛けとして、稲佐山ロープウェイのゴンドラをデザイン性と機能性に優れたものへリニューアルするとともに、新たにスロープカーの整備などを行いました。また、長崎固有の歴史的・文化的遺産の顕在化にも取り組み、旧グラバー住宅などが2015(平成27)年に『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』として、大浦天主堂などが2018(平成30)年に『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』として世界遺産に登録されるなど長崎の宝から世界の宝になりました。

このように多くの地域資源を磨くなどの取り組みを進めてきたことで、2005(平成17)年以降観光客数は右肩上がりに増加し、2017(平成29)年には過去最高の707万人を記録しました。

国内観光客に加えて、「新しいお客様を増やす」ということも大きなテーマであり、インバウンドの誘致や恐竜博物館の整備など新しい交流エリアの拡大を進めてきました。

そして、MICEによる訪問客も『出島メッセ長崎』の開業を契機として、新しいお客様を増やす柱にしていきたいと考えています。

今、長崎は、100年に一度と言われる進化の時を迎えています。この『出島メッセ長崎』も、その進化の一翼を担っています。

かつての出島が世界に繋がり、多くの物や情報が入り、そしてそれを求めてたくさんの人が集まってきたように、この『出島メッセ長崎』も現代の出島として、多くの情報や人が集まり、その出会いが化学反応を起こし新しいものが生まれていく。そして、当時の出島が長崎を活気づけてくれたように、

この『出島メッセ長崎』も現代の出島として長崎全体を元気にしていく、その力になることをめざしています。

長崎の観光とMICE

10月26日には「Nagasaki Presentation」と題して高宮副市長より、西九州新幹線の開業、松が枝ふ頭の2パース化、長崎スタジアムシティの取組みなど100年に一度の大きな変革を迎える長崎のまちの紹介とあわせて、観光をはじめとする長崎の強みやMICE開催都市としての魅力について説明がなされました。



MICE誘致における長崎の強みとして、まず、医学が挙げられます。長崎大学はBSL-4施設を中核とした感染症研究拠点の形成を進めています。また、日本唯一の熱帯医学研究拠点である長崎大学熱帯医学研究所や国内有数の放射線医療科学研究拠点である長崎大学原爆後障害医療研究所が立地しています。

産業では、日本一の魚種を誇ると言われる恵まれた海洋資源を背景に、高品質な水産品の一大産地として日本随一の水産業集積を誇っています。

長崎市には、造船・造機産業が集積しており、現在では、蓄積した造船技術を活かし、海洋エネルギー・環境等新たな分野の開拓に取り組んでいます。

加えて、広島と並んで、原子爆弾が投下された歴史から、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向けてメッセージを発信し続けており、パグウォッシュ会議世界大会をはじめ平和に関連する学会、大会等が多く開催されています。

長崎は、国際貿易の道を切り拓き、新しいアイデアを日本にもたらしたオープンマインドな都市であることから、平和、おもてなし、文化の多様性といった遺産を世界と共有し、国際会議後のレガシーを創り出していきます。

出島メッセ長崎設置の経緯と将来展望

10月26日のプログラムを締めくくる形で牧島政策監より、長崎市におけるMICEの取組みとして、ハード整備の背景や出島メッセ長崎の強み、誘致・受入の取組みなどについて説明がなされました。

長崎市におけるMICE開催の問題点として、施設不備が要因となりMICE開催機会を損失しており、長崎が発展してい



くためには新たな交流拠点施設が必要と考え、PFI事業によりMICE機能を中核とした複合施設の整備を進めてきました。出島メッセ長崎は、コロナ禍に建設されたことから、ハード・ソフト両面からさまざまな感染症対策を行っています。

長崎市におけるMICE誘致の課題として、産学官連携した誘致・受入体制の強化、戦略的な誘致活動の実施、経済効果をも高める取組みの強化が挙げられ、さらなるMICE振興を図るため、これまでさまざまな取組みを進めてきました。

2014(平成26)年には約60の企業、団体が構成される長崎MICE誘致推進協議会を設立し、『1団体1コンベンション誘致』をスローガンに積極的な誘致活動を行ってきています。

また、2016(平成28)年には、長崎MICE事業者ネットワークを設立し、出島メッセ長崎の開業前イベントなどを消費拡大・周遊促進に係る実証の場としながら153の事業者がMICE業務の地元受注拡大に向けた取組みを進めてきました。

2019(令和元)年には、ふくおかフィナンシャルグループ主催で『長崎MICEスクール』を開講し、2年間にわたって地元事業者のスキルアップを図ってきました。

現在は、『まちMICEプロジェクト』として、MICE開催による国内外からの訪問客をまちなかに呼び込み、周遊・滞在を促進し、消費拡大につなげるため、長崎らしいユニークな体験コンテンツの充実を図るための取組みを進めています。

引き続き、長崎市、DMO、出島メッセ長崎の指定管理者であるながさきMICEが主体となり、経済界と大学とも連携し、オール長崎でMICE誘致・受入に取り組んでいきます。

講演の後には希望者を対象とする内覧ツアーが実施されて、多くの人々が参加しました。



国際会議の将来像

10月27日にはJNTOスポンサーセッション“What is the future of association meetings?”が開催されました。国際会議の主催者である研究者2名をお迎えして、DXの先にある国際会議の将来像や、主催者・参加者に寄り添い、より選ばれるMICE開催都市になるための諸課題が議論されました。ここではモデレーターの豊饒 英之さん(DMO NAGASAKI)から、セッションの様子をご紹介します。



このコロナ禍は、かねてから技術を育んできたデジタルトランスフォーメーションを皮肉にも進めることになり、国際会議やMICEの開催のあり方、働き方にも大きな影響を与えることとなった。一方で、リアルな人の繋がりの必要性も再認識されている。

このセッションでは、オンライン・リアルの利便性・良さや限界を体感しつつある国際会議の主催者・参加者、MICE誘致を行いたい開催都市にとって、バランスはどこにあるのか、主催者・参加者の立場から大阪大学の仲野教授、奈良先端科学技術大学院大学の清川教授、開催都市の立場から大阪観光局の塩見課長補佐、MICE開催を推進する立場から観光庁の水口主査を交え、ICCAの西本理事とともに議論を行った。

冒頭、西本理事から、コロナ禍の中、開催中止が広がりつつも次第に、開催の必要性から徐々にオンラインに切り替わり、リアルの必要性から、ハイブリッド開催といったこの間のMICE開催状況や開催方式の変化について説明された。

以降、ハイブリッドでのパネリストによるディスカッションが行われ、まず、KJ法を応用した効果的な学会運営手法を考案された大阪大学の仲野教授からは、オンラインの特徴を活かし事前にプレゼンを行い、その後リアルを含めたディスカッション、ネットワーキングにより研究・働き方が改善されることをはじめ、デジタルとリアルの組合せの必要性が提起された。

次に2019年のIEEE国際会議を主催し、大阪の黒門市場でのレセプションを行うことで、参加者へユニークな体験価値を提案された奈良先端科学技術大学院大学の清川教授からは、ハイブリッドを含めた開催都市の魅力向上の必要性が発言された。

またこの清川教授の取組みに協力した大阪観光局の塩見課長補佐からは、黒門市場での主催者・参加者の喜びが事業者の喜びに繋がることを振り返り、市民を巻き込んだMICE誘致の必要性や主催者・参加者のニーズ把握の必要性が提起された。

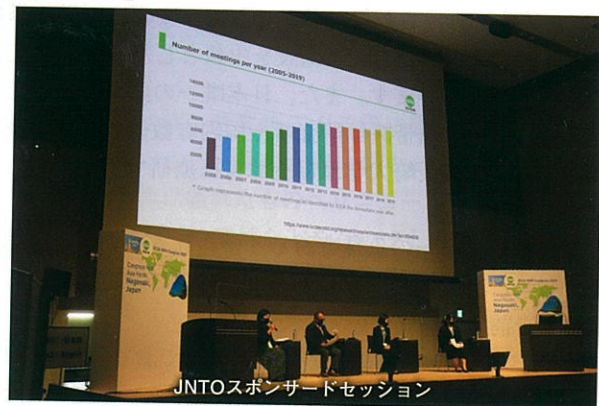
このような発言を踏まえ、国際会議を誘致支援する観光庁の水口主査からは、観光庁(国)として、ハイブリッドを含めたリアル開催のMICE誘致支援について言及されるとともに、このセッションの最後では、ご自身も学術経験があり、研究者としての顔を持たれている桃井参事官から、参加者の発言

を踏まえ、MICE開催手法がリアル一辺倒であった従来のあり方では、戻らず進化していくことや主催者・参加者にとってのオンラインの利便性、リアルでの人との繋がりの必要性、移動のための時間的・金銭的成本などを意識したMICE開催の魅力づくりの必要性について総括報告された。

今回のディスカッションを通じて、この間のデジタルトランスフォーメーションは、MICE分野に限らず今後の観光・交流業界を含めた、人々の暮らし、働き方に大きな影響を与えていることを再確認することとなった。

長崎初の本格的なコンベンション施設である「出島メッセ長崎」の開業や、来年秋の「西九州新幹線」の部分開業、その後のスポーツスタジアム開業を控える長崎市は、「選ばれる交流都市」をめざしており、昭和の観光都市からもともと街が築かれた主旨である交流都市に進化していく重要な局面にある。

改めてわれわれは地域に根差したDMOとして、住む人、訪れる人から喜ばれ、MICE開催により地域の活性をもたらすために、近世日本の外国への表玄関から始まり、造船業や石炭業で隆興した産業都市、さらに平和都市といった長崎のこれまでの歴史で培われた文化・風土など地域の魅力を、市民・事業者とともに引き出すとともに、長崎で開催する意義や楽しみ方をMICE主催者、参加者へ伝えることで、選ばれるMICE開催都市をめざしていきたい。



MICE主催者のトレンド

「MICE主催者のトレンド」セッションは、MICEイノベーション研究会によって企画されました。コロナ禍を契機として2020年7月に創設され、以来、定期的にオンライン開催される研究会には、多種多様な業界から約500企業/団体が参加しています。セッション冒頭では、コロナ禍以降のMICE主催者・運営事業者の課題やニーズの変遷、それぞれのフェーズで注目されたソリューションの変化を振り返りました。

「MICE主催者・運営事業者の課題やニーズの変遷」

コロナ禍により、国内外のMICEは、開催方式、コミュニケーション手法、マーケティング・マネタイズ手法、感染症対策など、これまでとはあり方が変容しました。同時に、MICE主催者・運営事業者のニーズも、大きく変化しました。参加者やスポンサー企業の声を受け、新たな取組みが必要となったためです。

コロナ禍でオンラインのメリット・可能性に気づいたことで、今後のMICE開催では、リアルとオンラインを融合した参加者の体験価値の向上が重要であるとの認識が共有されました。

続いて、パネルディスカッションでは、本研究会にて、今後もMICEでの活用が大いに期待されるシーズ技術・サービスを発表していただいた4名をパネリストにお迎えし、「異業種・異分野からみるMICE市場」について、「『Postコロナ』に向けたMICE戦略」について、議論しました。



「異業種・異分野からみるMICE市場」

パネリストからは、「大変興味深い市場である」、「セールス先・協業先として魅力的に感じている」、「自社にとって新たな市場になった」などのコメントとともに、MICE市場への参入後、継続的なビジネスが生まれ、MICEイベントへの導入実績を重ねていることが語られ、MICE市場が魅力的な市場であることが示されました。なお、MICE市場への参入にあたっては、「E」の展示会/イベントから参入する傾向が見られました。

「『Postコロナ』に向けたMICE戦略」

「出会いを効果的・効率的に発生させられる余地が多くある」、「参加につながっていない層が多い」など、従来のMICE業界関係者が、これまでに気づいていなかった「ビジネスとしての伸びしろ」に着目されており、そこに大きなビジネスチャンスを見出されていることがうかがえました。

本セッションを通じ、グローバル展開を視野に入れる企業や、自社のソリューションによるMICE市場そのものの拡大までを構想する企業まであり、MICEの可能性への高い期待がうかがえました。その一方で、デジタルサービス提供のためのインフラが整備されていないなどの根本的な課題も浮き彫りになりました。この点は、グローバルな競争においても、解決すべき課題と言えます。異業種・異分野への門戸を広げた新たなプレイヤー参入の促進により、日本発のソリューションの創出による国際競争力の強化、ひいてはMICE業界全体の活性化を図ることが確認されたセッションとなりました。

▼パネリスト(社名アルファベット順): オンライン登壇
筒雅博氏(avatarin(株)レベニューマネジメント部
シニアマネージャー)

幅朝徳氏((株)CRI・ミドルウェア 営業本部
第3営業部長 CRIWAREエヴァンジェリスト)

松尾佳亮氏(Sansan(株)ビジネス統括本部
マーケティング部 副部長 兼 Seminar One Unit PMM)

田中初実氏(Welltool(株)代表取締役CEO)

▼モデレーター: 長崎HUB登壇
田中弘一((株)コングレ 執行役員
営業企画部長)

西川つぼみ((株)コングレ
営業企画部 プランナー)



長崎のおもてなし

コロナ禍で現地開催の難しい状況が続く中、ICCA総会ハブ会場では、長崎の魅力を存分に堪能いただけるよう、安心安全に長崎の良さを味わい、参加者の皆さまに楽しんでいただけるようなプログラムをご用意しました。



開会式後に行われたウェルカムレセプションでは、出島メッセ長崎の屋上「シーボルトデッキ」にて稲佐山の夜景をバックに龍踊りを披露。その後、ホテルニュー長崎3F 鳳凰閣西に場所を移し、(株)ながさきMICE代表取締役社長 友池 昌寛氏の挨拶を皮切りに長崎産の食材をふんだんに使った中華料理をお楽しみいただきました。

入出口の消毒はもちろん、間隔を空けた配席にさらにパーティションを立てるなど新型コロナウイルス感染症対策に十分注意した上での開催で、参加いただいた皆様にも諸々協力いただくことが多くご負担をお掛けしたこともあったかと思いますが、久しぶりの現地参加により新たな出会いや情報交換ができて「参加して良かった。楽しめました。」というお声をいただき、開催した意義を深く感じる事ができました。

最後には長崎国際観光コンベンション協会 DMO(観光まちづくり法人) 推進本部長の豊饒 英之氏より今後の長崎のMICEへの展望とオール長崎で取組む意気込みのご挨拶をいただき、盛会のうちにお開きとなりました。

2日目のテーマディナーは会場での食事後、日本で唯一の本

格的中国様式の霊廟で、長崎に伝来した中国文化を象徴する場所、長崎孔子廟でユニークベニュー体験を開催。出島メッセ長崎の開業に向け、長崎市、長崎国際観光コンベンション協会（DMO）、地元事業者ともに一丸となり、孔子廟のご尽力のもと、新たに開発した場所でもあります。



孔子廟

ディナーでは、長崎国際観光コンベンション協会 会長の村木 昭一郎 氏、長崎孔子廟 館長の藩 秀貴 氏にご挨拶をいただきました。アトラクションとして、中国四川省発祥の伝統芸能、変面ショーと中国の伝統楽器、二胡の演奏を披露。

新型コロナウイルス感染症対策のため、ドリンクのみのご提供でしたが、ICCA恒例のユニークなドレスコード「コロナ終息後の訪れたい国の衣装」で参加いただき、皆さま思いの衣装でテーマディナーを楽しんでくださいました。孔子廟の様子は、コロンビアの本会場をはじめ、ハブ会場、そして全世界のオンライン参加者の方々のもとに配信されました。

ケータリングでは、長崎地元でハレの日に食べられる「吉宗」の茶碗蒸し、長崎名物トルコライス弁当、卓袱弁当など、長崎の美味しいものを食べていただけるよう、工夫いたしました。また、長崎の食べ物だけでなく、本会場であるコロンビアの豆を使用したコーヒーで休憩コーナーを設けました。



吉宗

参加者の方からは「長崎ならではの食べものを会場で食べられて嬉しい」とのお声もいただきました。

今後も長崎にお越しいただいた皆様に長崎を存分に味わい、お楽しみいただけるよう、ユニークベニュー、ユニークメニューの開発、まちMICEの発展に向けて出島メッセ長崎としても尽力していききたいと思います。

亀坂 美月さん（株）コングレ



総会参加者の声

それでは、今回のICCA総会に参加したみなさんからのコメントをご紹介します。日本でのハブ開催ということもあり、なんと日本から総勢20名の登壇者を送り出すことができました。このうちパシフィコ横浜の村山 公美さんは、グローバルセッションでの登壇となりました。

（株）横浜国際平和会議場（パシフィコ横浜）
村山 公美さん

今年のメイン会場カルタヘナは、2020年のICCA総会誘致を競った思い出もあり、現地を訪ねられなかったのは大変残念。とはいえ、長崎がハブ会場として手を挙げてくださったおかげで、開業を控えた出島メッセ長崎をいち早く体験するという貴重な機会となりました。プライベートも含め実に2年ぶりのフライトで、もはやFirst Time Attendeeのような緊張感と期待をもって旅立ちましたが、2日あまりの会議に現地参加して感じるのは、こうして密度の濃い時間を共有することで醸成される参加者の絆というのは、何物にも代えがたく、セッションの感想を言い合ったり、地元の料理を味わったり、ホストシティの方々の心遣いに触れたりして、体に刻まれた記憶と共に残る“絆”は、ネットワーキングと呼ばれるものより、もっとエモーショナルな何かだろうということです。

今回は、「最新MICE技術のインパクト」なるセッションにシンガポールからオンライン出演のEdward Koh氏と共にパネリストとして加わり、パシフィコ横浜で準備中のECサイトや、12月の「お城EXPO」で実証予定の5Gを使った遠隔監視や同期演奏の紹介などもさせていただきましました。テクノロジーは現にイベントのあり方を大きく変えています。重要なのは、イベントの目的を正しく理解し、そのゴールに到達するために、いかに世の中のツールを活かしつつ、全体をデザインできるかということなのでしょう。我々としては、参加者体験におけるバーチャルとリアルをシームレスに媒介すべく、パシフィコDXを模索しているところです。

最後に、この度はハブ会場日本開催の地の利を生かす形で登壇の機会をいただきましたが、出演することで得られた経験は、参加する何倍もの糧となったことをぜひお伝えたいです。準備（取材にご協力いただいた皆様）から本番（会場の皆様）まで、さまざまに励ましてくださった皆様、ありがとうございます。

（公財）大阪観光局 塩見 麻子さん

「会議は現地参加が望ましい」と改めて感じた会議となりました。セッション内容は、もちろんオンラインで聞けるため現地に行かなくても十分な情報を得ることはできます。しかし、それ以外の、参加者同士が交流できることは、現地参加における大きなメリットです。私も久しぶりに再会した日本各都市のコンベンシ



ョンビューローの方々、今回初めて会う方も含めて、非常に有意義な情報交換を行うことができました。コロナ禍において自分が行ってきた活動を参加者と情報交換する中で、正しかったと思うこともあれば、改善すべき点もみつき、今後の活動について改めて考える機会となり、まだ新しいひらめきを得ることができました。

セッションの中で印象に残ったのは「ハイブリッド開催は避けては通れない。ハイブリッド開催を成功させるには、オンライン参加者を取り残さない、疎外感を与えない、そして、現地に行けばよかった！と思わせる仕組みを作ることが重要」という意見がありました。ハイブリッド開催を成功させ、今後の現地開催につなげるためにも私たちコンベンションビューローとして、DXを活用しながら、現地らしさを出し、「現地参加すればよかった」を思わせることができるような提案が主催者にできるようになるために、まだまだ取組まなければならないことがたくさんあると感じています。

（公財）広島観光コンベンションビューロー
坂口 朱美さん

11月1日のオープンにさきがけ「出島メッセ長崎」で開催された「ICCA総会アジアパシフィック・ハブ会場（長崎）」へ参加しました。開会初日、田上 富久 長崎市長の基調講演などで開会しました。シーボルトデッキ（出島メッセ長崎のルーフトップ）での龍踊（じゃおどり）、そして翌日の孔子廟でのユニークベニュー体験を通し、長崎が持つ興味深い歴史を感じました。2日目、3日目にわたり、ハイブリッド型を体験できるICCAならではの興味深いテーマでのセッションがありました。今後、2025年にむけ長崎駅周辺再開発、長崎港松が枝観光船埠頭の2パース化そしてスタジアム整備などのプロジェクトが実施される長崎市は、興味深いコンテンツを有する都市となり、国際会議誘致のための強力な連携先となると感じました。出島メッセ長崎で開催されたICCA総会アジアパシフィック・ハブ会議（長崎）を通じ、MICE業界の最新トレンドと、取り巻く環境や問題解決へのきっかけを得ることができた貴重な体験でした。

（株）横浜国際平和会議場（パシフィコ横浜）
武澤 桂一さん

今年のICCA総会は、新型コロナウイルスの影響で開催地であるカルタヘナへの渡航は困難だったため、当初オンライン参加を予定しておりましたが、開業前の「出島メッセ長崎」にハブ会場が設けられるとのお話があり、ハブ会場での参加を決めました。

ICCA総会に参加する意義は、MICE業界の最新トレンドの習得に加えて、参加者とのネットワーキング構築にあると考えています。ハブ会場に集うことができたのは国内からの一部参加者のみではありましたが、コロナ禍でなかなか外に出ることができなかった中で、実に久しぶりに関係者と顔を実際に合わせ、同じ空間での経験を共有することができました。



技術の進歩により、コロナ禍においてもオンラインやハイブリッドといった形で会議を開催できるようにはなっておりますが、それだけでは実現しきれない、Face to Faceだからこそ経験できることの重要性を再認識させられた会議でもありました。

神戸コンベンションビューロー
軸丸 優子さん

神戸コンベンションビューローからは、長崎会場で2名、オンラインで1名が参加しました。現地参加したメンバーから「2日目のパーティーで使用されたユニークベニューの雰囲気良かった」、「セッションが終わった後の非公式なディスカッションがおもしろかった」と感想を聞いて、現地でしか味わえないMICEの魅力があることを再認識しました。できれば私も長崎へ行きたくったのですが、別件があって叶わず、オンラインでの参加となりました。オンラインでは、現地のように、五感を刺激する体験はできませんでしたが、好きな講演を好きな時間に聴いたり、用があって現地に行けなくても参加できたりと、オンラインならではのメリットを感じました。現地とオンラインを融合したハイブリッド開催は今後も続いていくと思うので、会議の受け入れ側として、オンラインへの対応強化をする一方で、一人でも多くの方に神戸へお越しいただけるよう、地域の魅力向上に努めたいと思います。



奈良県観光局MICE推進室
宮本 美香さん
オードネル 裕美子さん

奈良県としてはICCA年次総会への参加は今回が3回目で、2020年に続き今回もオンライン参加を検討していましたが、長崎がハブ会場の一つとして追加されたことでハブ会場への参加を決めました。その理由として、1.新規オープンする出島メッセ長崎の視察、2.長崎ハブ会場独自プログラムへの参加、3.F2Fのネットワーキングなどがあります。

ハブ会場では多くの地元プログラムが開催され、特にJNTOスポンサーセッション（今後の国際会議モデル）のディスカッションは、主催者と支援側、両方の立場からのお話を聞くことができ大変参考になりました。

パンデミックでさまざまな場面において自粛が求められる日々が続き、仕事の面でも接する人や分野も限定的になりがちでしたが、今回現地参加することで、さまざまなバックグラウンドを持った参加者や講演者の方々と交流することができ、とても良い刺激をいただきました。改めて対面開催の良さを感じた3日間でした。

最後に、ハブ会場での感染症対策への取組み、そしておもてなしに尽力を頂いた関係者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



(公財)横浜観光コンベンション・ビューロー
片野 憲歌さん



去年はオンライン参加でしたが、今年は国内にハブ会場ができるということで期待を胸に現地参加しました。出島メッセ長崎がMICE施設としての利便性が高いことはもちろん、これから数年先に向けた長崎の発展に交流拠点としてさらに進化する勢いを感じました。中でも今回特に印象的であったのは、コンベンション施設からも車でそう遠くはない範囲にパーティーが開ける長崎のアイコン的な「施設」があり、これを運営する「地元事業者」、そして受け入れる「市民」といった街全体が連携してMICEを歓迎していることが、都市としての強みだと思いました。市民からの協力があることに「これが長崎の文化です」という長崎の方からの言葉は大変印象深く残っています。

一方で、会期中は中継プログラムを通して渡航が難しい時期でも海外業界人のお話が生で聴ける機会は貴重でした。これからどんな状況でもMICE開催はできる!という、前向きな気持ちになることができました。

日本政府観光局 MICE プロモーション部
西込 千穂さん



ICCA年次総会アジアパシフィック地域ハブ会議に参加させていただき、長崎の魅力を深く知ることができました。特に長崎ハブ限定の講演では、開港から今日まで外国の文化とともに発展してきた長崎の歴史を再認識することができたため、長崎のイメージがより親しみやすい印象に変化しました。さらに長崎さるく(街歩きの意味)のイベントを通じた観光づくりや、市民の方々の観光に対する意識の変化は大変興味深く、実際に街歩きをしていると親切にお声がけくださる市民の方々に包容力豊かな市民性を感じました。また、会場となった出島メッセ長崎の屋上ルーフトップにて、稲佐山と夜景をバックに行われた龍踊りは息をのむほどの美しさで、必ずもう一度訪れたいと思うほど感動しました。

開催に至るまでの関係者の皆様のご尽力に敬意を表すとともに、現地で温かくおもてなしいただいたことを心より感謝いたします。今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。

出島メッセ長崎 館長 鹿尾 正博さん



この度はICCA年次総会ハブ会議 長崎を出島メッセ長崎にて開催いただき誠にありがとうございます。

昨今の「人が集まる」ことが難しい環境下で、いかに現地参加者に開催地としての長崎を感じ、楽しんでいただけるか、そしてオンラインでの参加者にも長崎を感じていただき、オンラインでのさまざまなストレスを軽減し、気持ちよくご参加いただけるか、今回のマルチハブ・ハイブリッド会議が今後のコンベンション業界、そしてMICE施設運営の新たな開催モデルとなれば幸いです。

開業前というタイミングでハブ会議の開催地に選んでいただき、長崎、オンラインでおおよそ90名の方をお迎えできたことに改めて御礼申し上げます。

またICCA Asia Pacific Chapter Officeの皆様、開催を支えてくださったスポンサー団体の皆様、そしてさまざまな場面でご支援、ご協力をいただいていた全ての皆様に心より御礼申し上げます。

御礼のこトば

この度は、ICCA年次総会長崎ハブ会議の開催にあたり、全国より現地及びオンラインにてご参加を頂き誠にありがとうございました。また、ご尽力をいただいた関係者の皆様、開催をご支援いただいたスポンサーの皆様へ深く感謝申し上げます。

また、コロナ禍での開催となりさまざまな制限の中で十分なおもてなしができない部分もあったかと思いますが、ハイブリッドでの開催に向けた準備、運営等の経験をさせて頂き、出島メッセ長崎で初めての国際会議としてICCA年次総会長崎ハブ会議を開催に先駆けて開催できたことを大変誇りに思っています。

ICCAのますますのご発展と、今回ご参加の皆様のご健勝を祈念するとともにさまざまな場面でご協力・ご支援を頂いたすべての皆様に改めて深く感謝申し上げます。

長崎市長 田上 富久



西本 恵子

Keiko Nishimoto, PhD, CMP

(一社)MICE総研(コングレグループ) 上席研究員。京都大学博士(経営科学)。2016年よりICCAアジアパシフィック部会担当理事、2021年よりICCASkills国際アカデミア委員。

450年にわたる世界との 交流の歴史を活かした 21世紀の交流都市・長崎に 出島メッセ長崎開業



11月、国際貿易拠点として世界と日本をつなぎ、新たな文化やイノベーションを日本にもたらしたオープンマインドな都市「長崎」に、次代を切り拓く新しい交流拠点が誕生した。

長崎市では「交流の産業化による長崎創生」をキーワードに、行政と民間が力を結集させ、これからの時代にふさわしい新しい交流から経済・産業の活性化を図る交流拠点施設整備・運営事業に取り組んでいる。その一環として、長崎駅西側で進められてきた国内外から多くの来訪者を呼び込むとともに市民交流を促進する「出島メッセ長崎」、都市ブランドの向上を図るホテル「ヒルトン長崎」、地域の賑わいと活力を生み出す民間収益施設として地元テレビ局の「長崎放送」の新社屋が開業。11月1日(月)、この「出島メッセ長崎・ヒルトン長崎・長崎放送合同開業記念式典」が出島メッセ長崎2階のコンベンションホールで開催された。地元政財界や大学、また全国各地からの関係者約500人が集い、「交流を生み、交流を育むまち長崎の新しい交流拠点」の誕生を祝った。

出島メッセ長崎を代表して挨拶した田上富久長崎市長は、感染症対策やアフターコロナを見据え新たなMICEに対応する機能を備えた駅直結の出島メッセ長崎の魅力に触れ、ここから人の流れや効果を市内全体に広める「まちMICE」の考え、また平和や医学など長崎の強みを生かしたMICE開催により世界の発展に貢献するまちづくりへの決意を示した。結びに、「この施設を活かしてスタートする



新たな物語に、ぜひ主役として参加をいただきたい」と呼びかけた。ヒルトン長崎の運営会社である(株)グラバーヒルの松藤章喜代



松藤社長

表取締役社長は、「官民の連携により多くのMICEイベントを成功に導き、日本、世界に長崎の素晴らしさが発信されることを確信している」とし、長崎放送(株)の東晋代表取締役社長は、「交流人口の拡大による経済の活性化と市民生活の調和を図るまちづくりへの参画は、創業以来、貫いてきた理念である地域貢献の集大成」と続けた。

来賓には金子 原二郎 農林水産大臣、中村 法道 長崎県知事、井上 重久 長崎市議会議長、宮脇 雅俊 長崎商工会議所 会頭が招かれた。金子大臣は、世界的なイベントを開催できる機会と場所の誕生に豊かな自然や食文化を活かした長崎発展への期待を祝辞に込め、中村知事は「地域活性化の起爆剤」とし、2022年に控えた西九州新幹線開業効果を最大限に高め、県下全域に経済効果を波及させるアクションプランを策定し、官民を挙げて実践に取り組むとした。また式典では、長崎の伝統芸能である長崎検番による祝舞、障がい者長崎打楽団・瑞宝太鼓による力強い和太鼓演奏が華を添えた。合同開業記念式典終了後には、長崎駅西口広場にて田上市長が「まちびらき宣言」を行い、広場を訪れていた市民らがクラッカーを鳴らして祝った。また出島メッセ長崎では、式典当日の午後に「市民開放」が行われ、予想を超える1,000名超の市民が来館。市民の関心の高さが窺えた。

この交流拠点の一翼を担う「出島メッセ長崎」を管理・運営する指定管理者(株)ながさきMICE(指定期間/2020年1月1日~2041年10月31日)は、(株)九電工を代表企業とし、戸田建設(株)、日本管財(株)、(株)コングレなど、PFI事業やコンベンション施設

運営管理の実績豊富な企業により組成され、開業後は指定管理者として20年間にわたり独立採算による運営・維持管理を行う。式典の中で挨拶した(株)ながさきMICEの友池 昌寛 代表取締役社長は、「4年間におよぶ設計、建設を経て、長崎市や事業関係者の協力の下、国内外に誇れる交流拠点が完成し、開業を迎えられたことを感謝し、引き続き、事業者同士連携して長崎経済の活性化を担っていく」と決意を表明。なお施設の運営、MICE誘致は、日本を代表するPCOであり全国各地でMICE施設の管理・運営を手掛ける(株)コングレが担当。同社の国内外でのネットワークや培われたノウハウを活かした施設の管理・運営はもとより、チーム長崎としてMICE開催目的、主催者ニーズ、参加者の満足を満たすMICE開催地「長崎」の価値創造に果たす役割も注目される所だ。なお式典終了の午後から会議室予約が入っていた出島メッセ長崎では、3×3のバスケットボール大会や音楽イベント、金融機関主催による全館貸切でのこけら落としイベント「長崎MICE EXPO」などが開催されている。地域に根付き、地域の賑わいに繋がる施設として、大きな第一歩を踏み出している。

今年、開港450周年を迎えた長崎市。来秋には西九州新幹線長崎ルートの暫定開業も控え、さらなる交流人口の拡大、経済活性化に期待が寄せられている。かつて長崎では、出島を中心に世界中から新しいものが集まる交易や、異国の人々との出会いと交流、そしてそこから異文化との共存や新しい施設や産業の誕生など、たくさんのレガシーが生まれてきた。交流の歴史の中でレガシーを生んできた長崎の新しい交流拠点「出島メッセ長崎」は、多くの期待を寄せ、長崎の未来へ向け出航した。